

レクリエーションへのイメージの変化をねらいとした

レクリエーション理論の授業実践

岡澤哲子（甲子園短期大学）

I、はじめに

日本レクリエーション協会の平成13年度事業計画によると、レクリエーション・インストラクターの全新規登録者の約80%がレクリエーション公認指導者養成課程認定校卒業生である。レクリエーション・インストラクターはこれからの社会に大いに必要となるレクリエーションへの理解者であるから、その養成の多くを担う課程認定校の役割は重要である。課程認定校が福祉系・保育系など様々な学科にまたがっていることを考慮し、養成カリキュラムのレクリエーション実技分野では様々な学科の教育目標や方法にあわせて実技内容を選択できるようになっている。しかしレクリエーション理論分野では、レクリエーション・インストラクターの役割をあくまでも「市区町村レク協会に位置付き、そこで提供する〈市民サービス型事業〉の提供スタッフとして活動すること」と定義し、それにしたがって学習内容が決められている。そのような共通の学習内容をもつ理論科目の授業では、学生が卒業後の様々な仕事のなかで資格を生かすだけでなく、地域や市区町村レク協会との連携を図ってレクリエーション支援の実践を広げられるよう意識向上を図るよりよい授業方法を探究する試みが必要になる。

しかしこれまでそのような授業方法を探求しようとしたレクリエーション理論の授業実践報告はされていない。レクリエーション理論の授業の中でレクリエーション・インストラクターとしての役割意識の向上を図るには、レクリエーションへのイメージを変化させることがまず必要であろう。そこで本研究は、レクリエーションへのイメージの変化をねらいとして、その変化をもたらすと考えられる学習内容中のキーワードを、教師が言語活動のなかで意図的に発するよう展開されるレクリエーション理論の授業実践報告をする。

II、研究方法

<対象>

K短期大学I回生女子120名（幼児教育科85名・家政科介護福祉士コース35名）内8名は欠席などで回答が得られなかったため、有効回答は112名であった。

<調査時期>

事前調査は授業第1週2001年4月16日、事後調査は授業最終週2001年7月2日

<調査内容>

「レクリエーションという言葉から連想する言葉を思いっただけ書いてください。」という質問に、制限時間10分で回答。連想する言葉は、1語の名詞か形容詞、あるいは2語程度の連語文とした。（事前調査、事後調査とも同調査を行った）

<授業内容と教師の言語活動>

授業内容の概略は表1に示されたとおりである。教師の言語活動の特徴は、表1に示されたキーワードを意図的に強調するために、その時間内に必ず5回以上発することである。教師の言語活動は逐語記録された。

表1 授業内容とキーワード

年月日	授業内容の概略	5回以上発言された キーワード
13.4.16	事前調査 オリエンテーション、インストラクター資格の取得方法説明。	
13.4.23	自分達の身近な悩みを考える事をきっかけに社会の悩みに発展させ社会の変化や、価値の変化に気づかせる。	変化 価値
13.5.7	コミュニケーションワーク実技を少し取り入れ、生活の質の向上がいかに個人にとって重要であるか、またその役割をレクリエーションが果たしていけることを理解してもらう。 レクリエーション種目を一覧させレクリエーションの範囲が広いことを説明。	コミュニケーション 個人
13.5.14	社会の変化や、レクリエーション運動のヴィジョンを説明し、演習ノートにまとめる。自分の余暇時間を仕分けることによって、社会と自分との距離を知る。	社会 地域
13.5.21	レクリエーションのベネフィットや、レクリエーションへの期待を説明。レクリエーションの歴史、特に日本におけるレクリエーションの流れを中心に講義。常に時代に翻弄されてきたレクリエーションを理解させる。	社会 地域 時代
13.5.28	地域を考えるきっかけとして自分の住んでいる地域のいいところと悪いところを書く。その後レクリエーション協会から出されている緊急5ヵ年計画のビデオを見る。ビデオの内容をレポートする。	地域 レクリエーション協会
13.6.4	支援と指導の違いについて説明。 市民サービス事業を実施した市町村の事例を読みながら、その対象者と内容をチェックする。その後事例に共通する「場」の種類について説明。もし就職したならどのようにそこでこの事業が展開できるかを考えさせる。	支援 市民サービス事業
13.6.11	所属の科別に対象者を想定し、ねらいを想定して事業を企画し、企画書を書く。それがどのような「場」になっているかを必ず想定して企画するように留意させた。	場 企画
13.6.18	レクリエーション支援のプロセス理解のため、先週立てた企画はレクリエーション支援者の役割の一部である行事の企画でしかなく、支援者の役割は場づくり全体であることを説明。	場づくり 企画・運営・評価
13.6.25	あいさつトレーニングの一部を代表者に実施してもらい、実施者へのインタビューから支援者の心について学ぶ。 レクリエーション協会の組織について演習ノートを使い理解する。 クラブづくりについて、身近な例をあげて説明。 その際の安全対策を考えさせ、また先に企画した事業の際の安全について考えさせた。	心 協会 クラブ 安全
13.7.2	全体のまとめ。事後調査	

II、結果と考察

1、反応語数の分析

高橋・高橋（1999）が使用した次の反応語 5 分類を用いて、反応語を分類した。

- ①感情反応：楽しみ、愉快、明るいなど、感情を表したもの
- ②叙述反応：休養、健康、遊びなど、説明的なもの
- ③種目反応：キャンプ、卓球など、活動種目をあげたもの
- ④共在反応：山、海、椅子など、活動とともにあるもの
- ⑤印象反応：笑い、和、輪など、活動に伴う印象を表したもの

事前と事後の反応分類別語数の変化を表 2 に示した。

表 2 反応語分類別語数の変化

()内は実数

	事前調査時	事後調査時
感情反応	6.5% (23)	4.8% (25)
叙述反応	38.5% (137)	61.4% (320)
種目反応	40.4% (144)	22.1% (115)
共在反応	9.6% (34)	5.2% (27)
印象反応	5.0% (18)	6.5% (34)

事前事後ともに叙述反応と種目反応の語数が多かった。叙述反応と種目反応が多いという結果は、高橋・高橋（1999）のレクリエーションへのイメージの最近の傾向として述べている結果と一致している。

反応語数の事前事後の結果を χ^2 検定を用いて検定した。その結果は表 3 に示されたとおりである。表 3 に示されているように叙述反応の増加は 1%水準で有意であった。すなわち、教師の意図的な言語活動がレクリエーションへの叙述的なイメージを広げたといえる。

表 3 反応語分類別語数の変化の有意差検定

	回答数が減少した人数	回答数が増加した人数	回答数に増減のあった人数	χ^2 値	有意差
感情反応	14	12	26	0	ns
叙述反応	5	79	84	65.19	**
種目反応	39	32	71	0.69	ns
共在反応	19	12	31	1.58	ns
印象反応	8	16	24	2.66	ns

** P < 0.01

本研究での対象授業は、新入生対象の前期授業であるため、レクリエーション実技の経験がほとんどなく、また現場実習の経験も少ない。そのため、実習で感じる感情や、印象、あるいは現場にレクリエーションとともに共在するものについて連想することが少なかったのであろう。活動種目については、授業の 3 週目にそれぞれを説明したが、種目反応は減少している。これはレクリエーション活動が多様であるということを単に種目名で示しただけではレクリエーションのイメージ変化にはつながらないことを示している。しかし、キーワードを意図的に強調して発したため、レクリエーションとはどういうものかと説明する叙述反応が有意に増加したと考えられる。また反応語数が有意に増加した叙述反応では、言葉の種類も、事前の 32 種類から事後の 79 種類に増えている。レクリエーションへのイメージは広がったといえよう。

2、反応語の内容分析

有意に増加した叙述反応の中で、調査前後にどのような内容的変化があるかを分析した。表4は、最も回答数が多かった10語の比較である。

表4 叙述反応語のベスト10（事前事後の比較）

事前調査での反応語と数		事後調査での反応語と数	
遊び	54	コミュニケーション	42
楽しいこと	11	遊び	37
みんなで遊ぶこと	10	地域の人との結びつき	30
体を動かすこと	9	企画・運営・評価	22
人とのコミュニケーション	5	ふれあい	16
みんなで何かする	5	市民サービス型事業	12
友だち作り	3	交流の場	12
話し合い	3	みんなで楽しくすごす	9
大人数でする	2	幅広い年齢	9
助け合い	2	協力	7

事後調査では、教師が強調したキーワード18語のうち、「コミュニケーション、地域、企画・運営・評価、市民サービス型事業、場」の5語が最も多い反応語となっている。これらの反応は教師がキーワードを強調したことの影響であると考えられる。連想された叙述反応語を総じて見ると、コミュニケーションに関連するもの、個人のベネフィットに関連するもの、学習内容に関するもの、その他の4つに分類できると思われる。その中でコミュニケーションに関連するもの、個人のベネフィットに関連するものに、事前事後で特徴的な違いがあるとおもわれる。その事前事後比較の結果は表5に示されたとおりである。

表5 特徴的な違いを示す叙述反応語

事前	事後
（コミュニケーション関連） 交流、みんなで仲良く、その場を和ませる、ふれあい、一つになる	（コミュニケーション関連） 出会い、人の気持ちがわかる、心と心を通わす、輪をひろめる、自分と人のため、みんなでこれからを考える、吸収しあう、共生
（個人のベネフィット関連） 憩いの場、心を広める、疲れをとる、気分転換、リラックス、自由な時間をすごす	（個人のベネフィット関連） 自己開示、心のケア、達成感、よりよい生活、学ぶ、元気付ける

コミュニケーション関連の語では、コミュニケーションを深めることがどのようなことにつながるかが具体的にイメージされている。また、個人のベネフィット関連の語では、単に日常から離れるイメージから、レクリエーションがもっている「再び回帰する」という本来のイメージへと変化している。このようなイメージの深まりは、社会や個人の価値の変化をキーワードに託して強調した教師の言語活動の成果であると思われる。

文献

高橋伸・高橋和敏（1999）「レクリエーション」イメージの変遷について—その経年的比較—
レジャー・レクリエーション研究第41号.32-33. 日本レジャー・レクリエーション学会 他